



# 志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13  
（株）網武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224  
Eメール: saigo@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体 3,000 円 + 税です。

## 合気語録

### 秘伝の持つ非公開の意味

「教えない」「見せない」「公開しない」「大衆化しない」が、西郷派大東流合気武術の流派の在り方で、これこそが「秘伝」を秘伝にする最大の理由である。秘伝は秘伝が隠されてこそ秘伝であり、その鍛錬法や修行法は「相伝」という形によって、「伝承形式」と経って後世に伝えられて来た。そして秘伝を旨とした。

しかし「伝承」は、あくまで類似コピーの形を免れる事が出来ず、決して「伝統」ではありえない。ここに「伝統武術」と「伝承武術」の違いが生ずる。武術の秘伝と言うのは、弟子を取り門人に教えれば、解らぬ事は再浮上するのである。しかし弟子を取らない人間はこれが解らないから、自分が、またほんの一口に立ちつばなしである事も解らず、「紙切れ」(初段以上のものが貰う免状の事を「かみきり」という)だけを貰って、これを有り難がっている愚者も少なくない。師匠より頂いた「紙切り」の中には、「切磋琢磨せよ」とあるではないか。

しかしこうした事に目を向ける段位取得者や資格取得者は少なく、「紙切れ」だけを有り難がり、まるで車のペーパードライバのような形で傍観者となり、これだけを後生大事にしている手合いも少なくない。真物の「人格」と言うのは、時代の流れと共に、徐々に磨れていっているようである。そして習・離・破と言うような言葉だけが、一般的に弄(もてあそ)ばれて、時代を一人歩きしているようだ。

捨身と言う「死ぬ」の意識  
現代文明は、「死」をひらすら怖れ、「死」から逃げ回る社会を作り出した。昨今の「ガン恐怖症」もこの一つである。そ

れはマスコミに誘導されて、「ガン」イコール「死」のイメージが植え付けられているからである。かくして人が、明日の事を憂い、死ぬ事を憂うようになった。そしてこれこそが、精神的動脈硬化の元凶となるようになった。

さて、「葉隠」等の武士道書に挙がっている言葉の特徴に、「死に身」なる語源が出て来る。死に身とは、「捨身」のことであり、我が身を最初から捨ててかかる態度をこう呼ぶ。命の遣り取りに於いて、生と死の二元対極の中で、ああ、こつかと迷う心は禁物であり、ひたすら自分のこれ迄の練磨した腕を信じ、ただ一刀の下に斬り据えろと言つ、不動心こそ真理があり、武人はこれに、大いに字ばねばならない。

かつて武士は、一朝事のある時は、我が身を捨てて全体に奉仕する事を以て、その価値観が認められ、「日々死を当てる。日常生活を営んだ種族である。これを想う時、同時の薩摩示現流のただ一刀の下に斬り降ろす、「一之太刀」に賭ける凄まじさに、この「捨身懸命」を感じるのである。我が剣のみを信じ、斬ったり、斬られたりするのは二の次にして、あの凄まじい斬り込みは、同時に自分が斬られる時の悲鳴を掛け声にして、とにかく斬り込むだけの事である。そして自分が斬られる時の悲鳴を「猿叫」という。

したがって、薩摩示現流には他流派に存在する、「二太刀以降」がない。

「一之太刀」を信じるのであるから、陶然「二太刀」等はなく、己を信じて討ち込む様は、さまに簡潔性を顕わしたものである。

武士にとって、死と言うものは生の隣り合せにあり、またこれが表裏一体の関係を為している。

## 合気戦闘理論 その九

連合艦隊司令部の高級将校を乗せた一式大型飛行艇が、悪天候のためミンダナオ島近くの不時着水した。その後、連合艦隊の参謀長であった福留中将、その側近が、アメリカ将校の指揮するフィリピンゲリラに柔調され、捕虜になって、重要な作戦計画書を奪われその為、日本海軍の以後の諸作戦は、悉くアメリカ力側の知るところになったという事件である。

この事件の張本人である、福留中将は、自決もしなければ、軍法会議にかけられる事もなかった。それどころか、第二航空艦隊司令官に栄転したという、まさに唾棄とするような待遇を受けた。

これが帝国海軍の実態であったのだ。ちなみに福留は終戦時、第十方面艦隊司令官として、シンガポールで無事に終戦を迎えている。そして戦後は多額の軍人恩給と年金を貰いつつ、優雅に余生を楽しんだと言われている。

こうした以上の二つの事件の首謀者の実態は、こうした高級軍人に、武士道の「トク片」もなかった事を雄弁に物語った事件であり、国民としては絶対に見逃せない太平洋戦争の真実であった。

そして反戦論者の中で、太平洋戦争並に、日中戦争に対する戦争責任の追求の声はあるが(特に昭和天

いものを級位以前のまじり時代の源流当時の事を伝えるのが伝承であり、ここには時代とともに変化するという進化や進歩がない。すなわち発展する原因を持たないのだから。

原因がなければ、変化する理由もない訳で、伝承は時代とともに変化する要素を持たないばかりか、骨董品の儘で何時の時代も、かつての風習と固執する事に従い、変化の原因を派生しないのである。

変化を齎さないと云う事は、要するに骨董品の範疇を一步も出るものでなく、移り変わる時代の流れから見れば、まさに時代遅れを、民族の文化の如き錯覚させる悪しき思想と言えよう。

さて、西郷派大東流合気武術は、他の大東流系(古典の柔術百八箇条をベースにする明治に創作された伝承技)と異なり、まさに伝統武術である。創意と工夫によって時代とともに変化し、古典の儀法に照らし合わせて、良いものは取り入れ、悪いものは、時代にそぐわなくなつて古くなつたものは再構築し直し、あるいは捨てるという事を常に、伝統武術の新陳代謝を自ら行って自浄作用を繰り返す武士道集団である。

自浄作用は伝統の根本である「習」から始まるものであるが、それは単に古典の伝承を習うに過ぎない。しかし「習」が次元を高め、高度化すれば、必ず習・離・破の段階を踏んで変化する。

果たして戦場において、高級軍人は勇敢であつたか?否、彼等は何処にもトク片の欠片一つ見出す事は出来なかつた。

実は、彼等は戦場においては、激戦地より後方の安全地帯に居て、前線の将兵に死守を力説し、特攻隊を力説して憚らなかつた、無能な職業軍人であつた!

大本営を牛耳つた戦争指導者達は、武士道不在と国家的戦略構想を持たないまま、幾多の人命を失なわしめ、天皇をロボット化した夜郎自大の輩であつた。

そしてこの基盤は、既に江戸時代に「武士道崩壊」が確立されていた。それを、見掛け上、後世の高級軍人達が猿真似したに過ぎなかつたのである。

非武装思想と平和主義の徳川封建時代  
鎌倉時代に端を発した武士道は、江戸中期に至つては、既に崩壊していった。その理由が、非武装国家を徹底させた「江戸時代」という特異な時代で、徳川封建時代こそ、日本列島は非武装で覆われた時代ではなかつたか。

この時代の歴史を洞察すれば、徳川二五十年間という歴史は、まさに「非武装・反戦の時代」であつた。徳川時代、日本には事実上の軍隊は存在していない。

最近では習・離・破の本当の意味を知る者が少ないが、本当の習・離・破は自分の師匠から離れ、次に、破る事だと考えているようだが、これは大きな間近である。

習・離・破とは、この一つ一つをこなして段階的に行なうものではない。

世間一般ではこれを各ランクと捕らえ、「習」から順にこなす事を想像するようだが、これは間違いである。また書道の世界などで云う、習・離・破とも違う。

わが流で云う習・離・破とは、「致す事」の意味であり、「致知」を指す。習つた「知る」ことを「致す」のである。

単に、士・農・工・商の頂点に立つ「武士」という身分と、階級が存在し、それは職業であつた。そして幕府はあるか、各藩の武士も、軍人というより、行政官吏でしかなかつた。

常に武士階級は、行政官吏の域の止まり、その武力と行動は、せいぜい治安警察行為(江戸・南町奉行、北町奉行の枠内の司法機関ならびにその他の警備)の範囲内であつた。

徳川家康が天下を取つた十七世紀前半には、「大坂夏の陣」や「島原の乱」が発生したが、これを鎮圧する為に、軍隊的な武力行動は一度も取られた事はなく、「立て籠りの叛乱集団」に対して、今日言う、機動隊が立て籠りの赤軍過激派集団を封じ込める「浅間山荘事件」(日本連合赤軍が人質を取つて山荘に立て籠り、警官隊と銃撃戦が繰り広げられた事件)ことこのものであつた。これらは軍事行動と言ふより、一種の行政・司法官吏集団が、凶悪犯を取り囲み、それを鎮圧するという規模のものであつた。そしてそれ以降、徳川封建時代を通じて、軍事行動と称される事件は、一度も起こっていない。

武士と軍人の違い  
徳川時代の武士は一種の職業であり、行政官吏である事は以上述べた通りである。そして武士階級は軍隊組織のそれでないことも、既に述べた通りである。

さて、一つの集団が軍隊組織として認められるには、最低でも、二つの条件を満たしていなければならぬ。

西郷派大東流合気武術総本部

### 大東流霊的食養道HP

「てがたな」の理を説く、大東流合気武術必見の書。

曾川和翁著 「大東流入身投げ」  
発行: 株式会社愛隆堂

発売定価 1800円+税

〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13  
網武出版 093(962)7740

http://www.daitouryu.com/syokuyou/

Saigo@Daitouryu Aiki-bujutsu U R L http://www.daitouryu.com/ & http://www2.ocn.ne.jp/saigo/ & http://www3.ocn.ne.jp/saigo/